聖心女子大学 2026(令和 8)年度 総合型選抜(英語外部試験利用方式)
問　題　　小論文

この資料は『ひのえうま――江戸から令和の迷信と日本社会』（吉川徹、2025 年、光文社新書）からの抜粋です。
「ひのえうま（丙午）」とは、60 ある干支（えと）の組み合わせのひとつです。近世以降の日本では、「ひのえうま」に生まれた女性は「気性が荒く、夫を食い殺す（嫁ぎ先に災いをもたらす）」という迷信があり、その年の出産を控えたり、子どもの出生年をごまかしたりするということが行われてきました。20 世紀以降に限ると、1906 年、1966 年、そして 2026 年がこの干支に当てはまります。この資料は、戦後日本社会における出生数の動向と、1966 年の「ひのえうま」の年におきたことについて論じています。
資料を読んで、以下の問 1～4 に答えなさい。解答は、問題ごとにそれぞれ指定された解答用紙に記入すること。

問 1

傍線部（1）～（10）について、カタカナは漢字で記し、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問 2

空欄（ア）～（エ）の中に入るもので最も適切な表現を、以下の選択肢の中から選びなさい。

（ア）①このように　②ただし　③たとえば　④だから
（イ）①けれども　②すなわち　③むしろ　④そのため
（ウ）①つまり　②なぜなら　③しかし　④それゆえ
（エ）①一方で　②ですから　③けれども　④それに加えて

問３

以下の１～６の文章で、資料の内容と一致するものに○を、一致しないものに×をつけなさい。

1. 戦後の日本社会、とりわけ 1950 年代後半から 1960 年代で意識された人口問題は、じっさいには「少子高齢化」に転じていたにもかかわらず、「出生数が多すぎる」ことであった。
2. 都市部と比べて少子高齢化が顕著であった農村部では、戦後直後から「子どもの数を増やす」という課題が意識されていた。
3. ひのえうまの 1966 年の出生数は前年比で約 25%減の 136 万 974 人であった。それでも翌 1967 年には「生み控え」された子どもがたくさん生まれ、出生数は前年比 35%増の 193 万 5647 人となった。その結果として、中期的には子どもの数は減らなかったと結論づけられる。
4. 著者は、ひのえうまによって、本来であれば生まれるはずだった 16 万４千人の子どもが生まれなかったことを、中期的なデータの分析により推算している。
5. ひのえうまの出産を避けるため、「前倒し出産」と「出産先送り」を選ぶ夫婦が多かった。それでは前倒しと先送りのどちらがより選ばれたかというと「（前倒し出生数）　＞（先送り出生数）」という現象が確認された。
6. 図 3-2 は、1963 年から 1969 年を結ぶ直線を引いた場合、「出生数は毎年約 4 万人ずつ増加していたはずである」という予想を表現している。

問４

この資料の内容を踏まえて、現代社会において情報と向き合う際に留意すべきことについて、論拠を明示しながら、あなた自身の考えを 400 字以内で述べなさい。

2026（令和8）年度　総合型選抜（英語外部試験利用方式）

資　料

※著作物の使用部分（資料4頁）については、著作権の関係により掲載できません

聖心女子大学